



関わり、心を寄せ、見守っていく 「行こう！東北へ」Report. 2

「地元復興」と「被災された方々の応援」という視点から取り組む「JAL 東北応援プロジェクト『行こう！東北へ』」。JAL グループは、同プロジェクトでさまざまな活動を展開しています。そこで、前号に続き今号でも、新たに立ち上がった活動をレポートします。



文／富山関子

右／南三陸も女川も海の幸がとてもおいしい町です。遠慮せずにどんどん被災地を見に来てください。と地元の方々がおっしゃるとおり、これからたくさんの人が足を運ぶことが大切だと思います（齋藤絵里さん）
左／今回一番の思い出となったのは「桜植樹のボランティア」です。将来、桜満開となる公園を想像しながら、参加メンバーが一丸となって作業にあたりました（田村一恵さん）



JALグループは、「行こう！東北へ」の一環として、グループ社員を対象とした新たな研修プログラムを立ち上げました。
この研修の参加者は、プログラムを通じて被災地の現状を正しく理解し、自分たちに何ができるのかを考えると共に、現地での宿泊や買い物などを通して、地元経済の活性化に貢献。さらにボランティア活動により地元の方々のお手伝いをしながら、交流を深めるというのが大きな目的です。
そして昨年9月、第1回目の研修として、77名が宮城県の三陸沿岸部を訪れました。現地では南三陸町のさんさん商店街を訪れ海の幸を堪能したり、女川町のトレーラーハウス宿泊村「EL FARO（エルファロ）」に宿泊。翌日は、桜の公園を造るための整地作業など「桜植樹のボランティア」活動に参加したり、女川町の語り部ガイドの方にお話を伺うなど、充実した2日間を過ごしました。震災後、すでに東北を訪れている人、今回が初めての人。それぞれがこの研修を通じて、刺激を受け、気づきを得られたようです。
東北を訪れたのは今回が初めて、という片野里美さんは、実際にその

場に立つて見た景色や様子は言葉では言い表せない感覚だったと話します。「テレビやインターネットで何度も見て知っているつもりでも、実際に見る光景はまったく違うものでした。でも、被災地の方々は私たちを笑顔で迎えてくださり、つらく、思い出したくもなかったはずの当時のお話もしてくれました。そして最後には笑って『また来てね』と見送ってくれました。語り部ガイドさんや宿の女将さん、商店街のおじさんの笑顔から、必ず復興する！させる！だからまた来て！』という強い思いを感じたと話す片野さん。
「やはり、しっかりと自分の目で見るのが大切だと思いました。私たちにできることは本当に小さなことかもしれない。だけど小さなことがいっぱい積み重なったら大きなことを私たちは知っています。私もこれ1回きりにせず、少なくとも1年に1回は必ず東北に帰ろうと思っています」
ほかにも「被災地がどんな復興を遂げるのかを末永く忘れずに見守ることが自分たちの使命だと感じた」（松浦浩次さん）、「社会貢献と言うと難しいことのように思いましたが、感謝の気持ちを持ち続け、謙虚に、そ

1 「被災地で学ぶ」社員研修を開始。
「私たちが三陸で見て・聞いて・感じたこと」

2

女川町を再び桜の町に！
桜を愛する町の皆さんの活動も応援します

して確実にひとつひとつ目の前のこととをやっていく。そんな小さな積み重ねこそが大切だと感じました」（天野由賀里さん）など、参加者にとってこの研修は、社会で果たしたい役割や社会貢献などに関して考えを巡

らせる、きつかけ、にもなったようです。併せて、「また現地に帰りたい」という声も多く聞かれ、この先も彼らが東北に心を寄せる有意義な機会にもなりました。今月も、約80名の社員が、被災地で学んでいます。



は8本の桜植樹を支援することができました。女川町では現在、中学生が中心となり、地震の教訓を後世に伝えるために、町内に21ある浜の津波到達地点に石碑を建てるという「いのちの石碑プロジェクト」が進められています。「女川桜守りの会」では、この石碑が忘れ去られることがないように、建立された石碑の脇に大漁桜の植樹を実施しており、JALグループはこの桜の植樹に協賛させていただきました。



町の花でもある美しい桜に見守られながら女川町が復興を遂げていくよう、私たちは今後も引き続き応援していきたいと思っています。

みんなの気持ちをのせた 「行こう！東北へ 特別塗装機」就航

昨年12月に就航した「行こう！東北へ 特別塗装機」。胴体のデザインはJAL 東北応援プロジェクト「行こう！東北へ」の取り組み趣旨に賛同し、事前にウェブサイトで応募いただいた方の「Facebook アイコン」を使用してつくられました。この特別塗装機が日本各地を飛び回ることにより、被災地への関心を改めて呼び起こし、ひとりでも多くの方に東北に行っていたくことで、被災地の観光と産業の振興に繋がりたいと考えています。



私たちが取り組むCSR活動に関する詳細は、
こちらでもご覧いただけます。
www.jal.com/ja/csr

女川町の方からのメッセージ

女川町宿泊村協同組合理事長 /
佐々木里子さんより

東北・宮城県にある小さな港町、女川町。津波により町の8割近くが壊滅的な状況に追い込まれましたが、全国、全世界の皆さまのご支援のもと、日々復興の道を歩んでおります。ありがとうございます。

皆さまのご支援・ご声援・ご協力そのものが私たちの力となり、トレーラーハウス宿泊村「EL FARO（灯台）」をオープンし、1年が過ぎました。私たちは女川町から被災地の復興を照らしていく灯台になることで、恩返しをしていきたいと思っています。

皆さまにも、年に1度でも女川町に足を運んでいただき、共に復興していく町を見届けていただきたいと願っております。

これからもできる支援。それは「復興の目撃者」になっていただく

こと。必ずきれいな町に生まれ変わる女川町をお待ちしております。



女川町観光協会 /
語り部ガイドの方より

東日本大震災から3年が経とうとしています。女川町は住宅の7割が流出、人口のおよそ1割、827名の尊い命を失いました。

大好きだった町は荒廃し、多くの大切な人を奪われました。震災後しばらく、私たちは足踏みしかできず、前に進むことも、どこを目指すかもわからない状態でした。

そんななか、全国の皆さまのご支援や、温かい言葉に手を引かれ、今は少しずつ前へ進んでいます。お願いがあります。これからは私たちを見守ってください、手を放してもらっても大丈夫です。自分の足で歩いていく姿を見せることが恩返しだと思います。ぜひ女川町にお越しください、「この町を何とかしたい」と思い前進する仲間を見てください。大きな犠牲を払いましたが、そのなかでしか学べなかったことを全国の皆さまに伝えます。

最後にこれまでのご支援に深く感謝します。女川は町の復興、町民の復幸を目指します。来ていただいた方が羨ましくなるような町を創ります。これからもこの町を見守っててください。